

富士の民話 あれこれ

鶴の茶屋

本市場の保健女性センター西側に、「鶴芝の碑(鶴の茶屋跡)」が建っています。碑の前を通る道は旧東海道、その昔、多くの旅人が、この鶴の茶屋で一服し、旅の疲れをいやしました。今回は、茶屋の子孫で、碑を守っている荻野さんからお話を伺いました。



昔、本市場は、東海道五十三次の吉原宿と蒲原宿の間の宿でした。間の宿とは、大きな宿場と大きな宿場の間にある小さな宿場のことで、そこに一軒の茶屋がありました。その茶屋は、ねぎの雑炊や甘酒、うなぎの蒲焼きなどが名物で、結構繁盛していたそうです。茶屋の前には小川が流れていて、そのわきに大きな柳の木が立っていました。道行く旅人たちは、その木に馬をつないで茶屋に腰かけ、名物を食べては旅の疲れをいやしました。

そして、その茶屋に腰かけ、富士山を仰ぐと不思議なものを見ることができました。それは鶴の姿でした。富士山の中腹を望むと、林の間に芝生が見えて、夏は青く、冬は白雪に輝き、その姿はまるで鶴が舞っているように見えたと言います。

また、亀が泳ぐ姿のようにも見えたと言われており、「鶴芝、亀芝」と旅人たちは、とても珍しがりました。そうしたことから、だれいふことなく、この茶屋を「鶴の茶屋」と呼ぶようになったということです。



鶴芝の碑は、京都の画家・蘆州が鶴をかき、書は江戸の儒者・亀田鵬齋が書いたもので、文政三年(一八二〇年)に建てられました。私が生まれたころには、もう茶屋はやっていなくなりましたが、祖父の代までは茶屋を開いていたそうです。そのためか、古くから住む近所の人たちの中には、我が家のことを「茶屋の家」と呼ぶ人もいますよ。



荻野九馬さん(本市場)

こちら編集室

先日、神戸の「雨ごい曼陀羅」の祭りを取材した。その日は、雷が鳴り大雨洪水警報が出るほどのどしゃ降り。毎年、祭りの日は、そんな天気が多いという。まさに「雨ごい曼陀羅」の御利益だろう。その曼陀羅は、日蓮上人が少雨に悩む村人のために法華経を書いたもので、1年に1回、しかもご開帳の儀が行われるほんの数十分間しか、見られないという代物。今でこそ水に困ることはなくなったと思うが、地域の人たちが一心に「身体健全」を祈る姿は、その昔「命をつなぐ天の恵み」を拝むことと同じなのだと実感した。

人口 234,150人
男 116,696人 女 117,454人
世帯 74,776世帯 (7月1日現在)
発行・編集 富士市総務部広報広聴課
静岡県富士市永田町1-100 ☎51-0123

